

# 小中学校国際交流支援プロジェクト ～小学校の国際交流支援「テディベアプロジェクト」～

団体名 ● 清水ゼミナール / 代表者名 ● 清水和久(人間科学部こども学科・教授)

## はじめに

小学校では英語が教科になった。そのため高学年で週2時間の英語の授業が実施され、英語に接する機会が増えた。しかし、小学生にとって英語を学ぶ必然性を感じることは、日々の生活だけでは難しい。ぜひとも実際に海外の子供たちと交流する機会を持つことによってツールとしての英語を意識する必要があると考えた。

そこで、国際交流プロジェクトとしてNPOのグローバルプロジェクト推進機構(JEARN) <https://jearn.jp/> が行っているテディベアプロジェクトに大学生として参加し、海外の子供たちとぬいぐるみを通じた国際交流の支援を行った。



図1 テディベアプロジェクトの構図

プロジェクト全体の目標は、異文化自文化を理解し、英語のツールとしての必要性を児童が感じることである。よって大学生側の目標を以下の2つとした。

- 1) 導入授業としてのワークショップの企画実施
- 2) 日本と外国の教員間のやり取りの支援

## 活動内容

このプロジェクトに参加した学校は、珠洲市立蛸島小5・6年、野々市市立館野小6年、金沢市立四十万小6年、金沢市立西小6年、金沢市立大野町小4年、羽咋市立羽咋小6年、金沢星稜中1年の7校12クラス。交流先の台湾の学校は、台北市立五常小、嘉義市立精忠国民小、宣信国民小、文雅国民小、高雄市立新甲国民小の5つの小学校であった。

期間は、台湾の新学期が始まる9月から、翌年の3月までの6か月間である。大学生は交流担当クラス

を持ち、担当の教員と1か月に1度 zoom 上の研究会で、進行状況を知り、支援内容については毎回話し合っていた。

表1 活動日程

月	小学校の活動	学生の活動内容	研究会
4月		国際協働学習について学ぶ	
5月	プロジェクトに参加	ワークショップの企画	
6月	100人村ワーク体験3校	ワークショップの実施3校	第1回
7月		交流校決定 LINE-G作成	第2回
9月	日本からベアの送付	(教育実習のため休止)	第3回
10月	台湾のベア受け取り	TV会議の練習相手	第4回
11月	TV会議①自己紹介	TV会議本番サポート(10回)	第5回
12月	X'masカードの交換	英語でカード作成	
1月	TV会議②SDGs発表会	TV会議本番サポート(4回)	
2月	ベアの送付(台湾へ)	まとめの冊子作成	第6回
3月	ベアの帰国		

### 1) 導入授業としてのワークショップの企画実施

4月から準備をして国際交流のための導入授業「世界がもし100人の村だったら」のワークショップの企画を考え、6月から3校(四十万小、羽咋小、館野小)で実施。



図2 小学校での100人村の演技の様子

このワークショップは、基本的なものに、小学生が理解しやすいように「世界クイズ」「世界のあいさつ」「100人村の1日体験」「富の分配」の4点を学生が考えて追加して実施した。特に学生は世界各国のコスチュームを着てその国の人になりきって、進行役を務めたので児童の関心は高かった。世界の富の偏在をアメの配布の割合で感じてもらった。例えば、

貧しい国では20人で1個のアメしかもらえないのに、日本も含む先進国では、20人で80個あまりのアメを独占できることを体感し、世界の様子を知ることの重要性知ってもらうことができた。

## 2) 日本と外国の教員間のやり取りの支援

### ● LINE での支援

台湾の先生と日本の小学校の先生は翻訳アプリを仲介にした LINE グループで連絡を取ることになる。大学生もその LINE グループに入り、先生同士のやり取りに参加した。LINE に写真がアップされた時には、必ず感想を言うなど、先生同士の交流の潤滑油になるように努め、進行状況を把握した。

### ● TV 会議の支援

また、台湾と日本との TV 会議では、本番の前に、日本の児童の練習相手となり、カメラ目線で話すとか、相手の発言の後には必ず反応を示すなどのアドバイスと行った。

### ● 翻訳サービスの支援

台湾の先生から日本小学生向けにSDGsで自分たちができることの内容についてアンケートの依頼があり、日本の子どもたちが書いた手書きの文章を学生で手分けして英語に直し、台湾に送った。

## 3) 参加した学生と現場の教師の感想

### ● 学生の感想

・「ぬいぐるみを交換するだけで国際交流はできるのかと思っていた。しかし、児童はそれに愛着を持ち、自分たちの代わりに留学していると感じていた。このぬいぐるみをきっかけとして、国際交流ができることは不思議な感覚だが、メッセージカードを送りあったり、テレビ会議でぬいぐるみの様子を知らせたりする様子から児童、教師を繋げている架け橋の存在が「ぬいぐるみ」であると感じた。

### ● 教師の感想

・視野が広がり、グローバルな意識をもって教育活動をして行きたいと思えるようになったこと。  
・大学生や台湾の学生と交流することで、子供たちと教員両方ともに国際理解に対する視野が広がった。



図3 台湾からやって来たカードとぬいぐるみたち

- ・教育課程の中に組み込みやすかった
- ・違う価値観から学ぶことの大切さを見童が学んだ
- ・テディベアを通して学級に一体感が出た。学習のゴールがまとめて終わり、発表会して終わりではなく、どうすれば伝わる?と一層考える姿が見られた。
- ・主体的な児童を育てる機会になった。
- ・子どもたちに本当の相手意識をもって活動に取り組ませることができたこと。

## 成果、結果の考察

大学生は、半年間、国際交流のサポートをする中で、子供たちや先生の取り組みを間近に見て、ぬいぐるみを媒介とすることでの国際交流の教育的効果や、子供たちの外国に対する好奇心やそれを支える先生方の取り組みの姿勢を感じることができた。大学生が先生とは違ったアプローチでサポートすることで、交流自体に余裕が生まれ、先生方も国際交流を楽しむ余裕が生まれたようである。

## 今後の課題、展望

次年度も、学生には主体的に試行錯誤する中で国際交流のサポートの面白さを感じてもらいたい。またコロナが収まった時点で、交流先の台湾へ大学生が訪問し、日本の子どもたちに台湾の様子を伝える機会が来ることを願っている。そして学生が教員になった時にぜひ国際交流にトライしてほしい。